

第264回山口西田読書会(=2021年3月6日開催分)の Protokol

担当:末永

第264回は3月6日(土)に開催され、まず、佐野先生の Protokol を中心に会が進行した。

西田が、「S is P」という形の判断の構造を手引きとして種々の対象界を考えようとする難解な箇所であり、参加者たちも、投げかけられる問いに対して答えに窮する場面が多かった。本日の Protokol にも関わる重要な段落であるので、僭越ながら、以下、先生のご担当箇所を反復させていただく。

西田によれば、「経験的一般概念」が問題になる場合(例えば「この花は赤い」という経験的判断において)一般(=赤いという述語)と特殊(=花という主語)との間にはなお間隙がある(≡「この花」の赤さについて、規定し尽くされない部分が残る)がゆえに、最後の種差を超えるためには(≡「この花」がその赤さに関して完全に規定されるためには)、「超越的にして不変なる基体」(≡判断の妥当性を保証するものとしての、この場合は現に存在する赤い花;超越的個物?/超越的一般?)が必要となる。

それに対し、「矛盾の限定によって構成せられたる対象界」(例えば経験の助けを借りずに諸々の数学的認識[演算や幾何学の根本命題]が成り立つ「数理の世界」)においては、一般と特殊との間に、両者の間隙を埋め、両者を結合する媒介者としての「超越的にして不変なる基体」は必要とされない。なぜなら、一般的なるもの(=「数」という純粋概念、例えば「自然数」)が即特殊化の原理であると同時に、特殊なるもの(=1,2,3……)を成立させる場所だからである。そこではむしろ、特殊なるもの(=1,2,3……)が基体という意義をもつことになる。すなわち、特殊なるものが、一般なるものからその規定様式(≡否定=限定される仕方)を受け取ると同時に(≡諸々の自然数が、1から始めてそれに順次1を足して得られる数として、自然数という一般概念の側から規定されると同時に)、各々が相互に否定し合うことによって(≡1は2でも3でもない数、2は1でも3でもない数、3は1でも2でもない数……として、これらの数自身が相互に規定し合うことによって)、一個の全体を統一的に形成する(≡自然数の集合を成す)ことになる。さらに進んで、一個の全体の中で各々が特定の部分を形成する「各自唯一なる個体」となる(≡各々の自然数が、それ以外ではないまさに「この数」として、自然数の集合の内部で自らの場所を占めることになる)。

これはちょうど、被造物としてのモナドが、「窓がない」と言われる単純実体でありながら、己以外のすべての他のモナドを己自身へと映し込み、そういう仕方で諸々のモナドが相互に対応関連し合いながら、一つの宇宙を形作っているのと同じ事態を指している。一点の中心への集中が、まさにその集中過程において、無数の中心の全体と対応し合うダイナミックな仕組み、ライプニッツ(1646-1716年)はこれを「予定調和」と呼ぶ。ライプニッツによれば、このように世界を予め采配ないし調停したのは、神である。諸々のモナドがそこに於いてある宇宙そのものが、諸々のモナドが相互に対応関連し合う「予定調和」というダイナミズムを含んでいる。西田の言う〈一般的なるものが特殊化の原理であると同時に特殊なるものを成立させる場所である〉とは、そういうことであろう。西田の記述には、一つの中心へと集中する方向と全体へと脱中心化する方向が、同時に生起するダイナミズムの下で、モナドと宇宙が形成されるという、ライプニッツのモナドロジー的世界観が反映されている。

なお、会の進行過程で、「一般なるものは、すべてを否定すると共に、すべてを肯定するものでなければならぬ」(同書、192頁)という一文が議論になった(同書、203-204頁の記述との関係で)。簡単には答えの出ない問いであるが、敢えて言うなら、一般なるものは、矛盾の限定および矛盾の統一の「原理」としては、この原理に従って「唯一なるもの」(≡「各自唯一なる個体」)として限定される特殊なるものにとって否定的であると同時に、この否定的原理が予めそこに下絵として書き込まれつつも、限定されたものを統一的に包摂する「場所」としては、この同じ特殊なるものにとって肯定的であるということであろう。

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、193頁10行目から195頁3行目まで
(=「働くもの(二)」第5段落)

【テキスト要約】

次の段落では、一般と特殊との関係の根柢にあるとされる「自己同一なるもの」(同書、193頁)が話題になった。一般と特殊との関係の根柢にある「自己同一なるもの」とは、西田によれば、「自己を肯定する〔≒場所〕と共に否定する〔≒原理〕もの」であり、この意味で、「自己自身に矛盾するもの」である。

先に話題になったように、「単なる類概念的統一の対象界」においては、一般(=「赤い」という述語)と特殊(=「この花」という主語)との間に間隙が残り続ける。言い換えるなら、ここでは主語と述語の両面が合一することはなく、その限りで、一方に「超越的な物」(≒判断する主観に対して外在する物自体；山田自体)を、もう一方に「内在的な主観的統一」(≒判断する主観に内在する類概念；「種々なる性質を有つと考えられる物」としての山田さんの概念、山田表象)を想定せざるをえない。

ここで、西田の言及するカント(1724-1804年)やカントが生きた時代の講壇哲学者たちが、単なる概念や普遍との対比において、個物の可能性を説明する際に引き合いに出した「汎通的規定の原理」という存在論的原理に触れておきたい。その要諦は、ここでの西田の記述との関係で言えば、現実存在する物(個物)は、それが今現在そうであるために、無限に多くの規定を経ている。現実的な物は、すべて完全に規定されている≒汎通的に規定されている、という点にある。しかしながら、西田の言う「単なる類概念的統一の対象界」においては、一方に「超越的な物」(≒判断する主観に外在する物自体)を、他方に「内在的な主観的統一」(≒判断する主観に内在する類概念；「種々なる性質を有つと考えられる物」の概念ないし表象)を想定せざるをえない。こうした状況下において、SisP型の判断において主語にあたる物が、すべて完全に規定される≒十全に述語づけられることはない。ここでは、判断の対象となる物が、あらゆる角度から、他のあり方、あるいは反対のあり方を排除して、現に今この個物として存在するような物、それ以外ではないまさに「この物」として現実存在するような「個物」に成っているとは言えないのである。

西田の記述から推測するに、これは、「単なる類概念的統一の対象界」においては、一般と特殊との関係の根柢にあるとされる「自己同一なるもの」が、その自己同一性を徹底させていない≒その自己矛盾性がいまだ十分明確になっていないことを意味する。言い換えると、この「自己同一なるもの」が、個物の生成の仕方である「矛盾的限定」および個物と個物との関係の仕方である「矛盾的統一」の原理を含むような場所(≒諸々のモノダが相互に対応連関し合う予定調和というダイナミズムを含みつつ、諸々のモノダがそこに於いてあるライブニッツ的宇宙)に成り切っていないことを意味する。

これに対して、「矛盾的統一の対象界」においては、一般と特殊との関係の根柢にある「自己同一なるもの」が、その自己同一性を徹底させている≒その自己矛盾性が既に明確になっている≒「矛盾的限定」および「矛盾的統一」の原理を含む場所に成り切っている。それゆえ、「矛盾的統一の対象界」においては、各々が相互に規定し合うことによってそれ以外ではないまさに「この物」として現実存在するような「個物的なるもの」と〔、別の〕個物的なるものとの直接の関係のみ(同書、194頁)が問題となる。

要するに、ここではもはや、外に「超越的な物」(≒判断する主観に外在する物自体)を、内に「内在的な主観的統一」(≒判断する主観に内在する類概念)を想定する必要がなく、この意味で、判断主体としての「自己」は消える。実際、自己の「自」性が脱落するこの地点で、西田は、「自己といふ如きものが失はれなければならぬ、外にも内にも総合的中心といふ如きものがなくならねばならぬ、単に自己の中に自己を映す鏡の如きものとならねばならぬ」と言う。「反省的範疇の対象界と構成的範疇の対象界とが合一」とするとは、あるいは「かかる鏡に於ては、映すことは構成することであり、構成することは映すことである」とは、同じ事態を指しているのであろうが、これは、「外に」基体として考えられた超越的一般者が「個物的なるも

ののすべてを包含する場所といふ如きもの」へと、「内に」この基体の表象として考えられた内在的類概念が「対象界を構成するアプリアリ」へと転化する事態、しかも前者と後者がびたりと重なり合う事態を意味するであろう。

なお、先の段落で、予定調和という原理を含むライプニッツ的宇宙において相互の対応連関によって規定されるモナド的なものを指す表現として、「各自唯一なる個体」という言い方が使われた。これは、すべてを否定しつつ肯定するものに於いて自ら相互否定することによってそう成ったものとしての「個物的なるもの」を意味する。今回の段落では、そこから一步進んで、いわば〈映すものに於いて映されたものとして各自自己同一なる個物〉という言い方へと移っている。もっと西田の言葉に即して言うなら、そこでは、「各自が自己同一なるものとして、矛盾の関係によって統一せられる」限りでの、しかも「自己の中に自己を映す鏡」(≡「単に映す鏡」(同書、223頁)・「自ら照らす鏡」(同書、260頁))に「映されたるもの」(同書、194頁)としての「個物的なるもの」が話題になっている。

【哲学的問い】

「内が外となり、外が内となる」。これは、私の恩師に当たる方のご論文のタイトルであるが、佐野先生も、前回の講読箇所における内と外との素朴な区別について、注意を促しておられた。

「かかる鏡に於ては、映すことは構成することであり、構成することは映すことである」という西田の一文は、(判断主体を総合的中心とする)内と外の素朴な区別が消失した事態を指しているのであろうが、それと表裏一体に、判断する自己の「自」性も消滅するというのなら、この転換の出来事を、いったい誰が、どのように知るのであるのか。

【参考文献】

池田善昭『『モナドロジー』を読む——ライプニッツの個と宇宙』、世界思想社、1994年。
石川文康『カント第三の思考——法廷モデルと無限判断』、名古屋大学出版会、1996年。

*3月15日に加筆修正(末永記)